

保育実践でない限り、保育は箱庭の中のまき(ま)ことに終る危険を支持してゐる。

保育対象を歴史の中に把握するということは、超越的、ドグマ的な歴史を対象に押しつけるということであつてはならない。ここに戦時中の幼児観の批判されねばならない点がある。(例えば武政太郎氏「幼児の心理と教育」一九四三、藤井書店)それは、幼児の中に歴史を見ることでなければならぬ。幼児を個性的に、真に独自のものとして把握することは、ここから可能になるであろう。

なお、これらの点について、Use Forest, Preschool Education, 1927, Robert Rusk, A History of Infant Education, 1951, A.J. Sorokina, Lehrbuch der Vorschulpädagogik, 1951 や乾孝・天野章「保育のための児童心理学」などについて考察してみたい。

デューイの幼児教育思想

とその現代的意義

大阪学芸大学 小川 正 通

一、このテーマをとりあげた動機

(1)今日の米・英・日の幼児教育の理論と実際は、デューイの大きい影響を受けている。(2)しかるにわが国の幼児教育界では、フリー

ベルの名のみ高く、デューイは理解されていない。現代的見地から、デューイを高く評価すべきである。(3)この学会に思想面の発表が少ないこと。

二、デューイの幼児教育関係文献と当時の教育界の状況

ジョン・デューイ John Dewey (1859-1952) はアメリカが生んだ世界的な経験論的哲学者。多数の著書・論文があるが、幼児教育プロバターのものは皆無。しかし私の知る限りでも、「学校と社会」(一九一九)、「学校と児童」(一九〇五英國版)、「思考の方法」(一九一〇)、「民主主義と教育」(一九一六)の四冊で、幼児教育に言及、一貫して、フリーベル批判を通じ、自説を展開。しかし体系的ではない。いずれも約四十年前以上前の論説。

一九世紀末―二〇世紀初頭のアメリカの一般教育界は、ベスタロッチー、フリーベル、ついでヘーゲル派、ヘルバルト派の歐洲教育思想が紹介、唱導されていた。その間に、アメリカのホール、ついでソーダイクなどの「児童研究」運動が漸く擡頭。なお實際教育では、「書物中心」の旧教育が支配的だった。幼稚園界では、フリーベルの伝統を墨守し、それを一層形式化したプロローを代表者とする保守派の力が強く、それにヒルを代表者とする進歩派が対立。論争十年以上。「児童研究」とデューイ・キルパトリックに支持されたヒル派の勝利に帰した。そして「児童中心」に転向し、多少の変遷をへて、これが今日のアメリカ幼稚園教育の本流である。

三、デューイの幼児教育思想と現代的意義

(一)デューイの成長としての教育

人間の生命は発展であり、教育は成長発達に関し、教育過程は経

験の改造・再構成である。幼少期の未成熟の特徴は、他による成長の「依頼性」と「可塑性」で、後者は経験から学ぶ能力・習慣を作る力である。受動的習慣が土台だが、教育上、能動的習慣が重要で、それにより人間は、環境に適應するだけでなく、環境を克服する。児童は自己の能動的活動経験により、社会環境を媒介とし、目的・手段・方法が連続する発達をなす。個人の理想的成長は、理想社会を保証する。

(二) フレーベル批判―開発主義と象徴主義

フレーベル思想は、開^{アノク}発^{エテシテ}(展開)の思想で、人間の中に内在する神的統一の展開を説き、デューイが単に成長の能力と考える本源的自然に神性(善)を認める。しかもその開発に際して、絶対(神)の象徴としての恩物媒介の心要論を唱え、象徴主義に陥った。フレーベルが幼き者の生得的能力の意義を認め、「遊びは一切の善なるものの源泉である」(人間の教育)とし遊びの教育的価値を発見し、幼き者に深い愛情を示し、児童研究と成長概念を一步前進させたのは、偉大な功績であると、デューイも称讃の辞を惜まない。しかし彼は、遊びは児童の心身の自由な自己表現発達力の実現充実であり、「心理的態度で、それは与えられ、決められた仕方、恩物・遊戯・作業の既成の組合せに従うことからの完全解放」を要求する。フレーベルとその垂流は、恩物により宇宙の理法を幼児に知らさんと考え、また幼児を円形に集め、それが人類の集合生活の象徴だと意味付けようとする。しかるに子どもには現実と象徴の両者を意識できない。故に象徴を手段とし精神的真理を教えようとすることは、かえって不誠意を教え、感傷主義を注ぎ、感覚主義を養うこと

になる。しかしデューイはまたフレーベルを尊敬して、万有在神論に基づく開発思想と象徴的恩物観は、(1)当時の心理学・生理学の未発達、(2)ドイツの抑圧的な政治・社会状況との産物であるといひ、フレーベルの継承者を警しめ、科学が進み、自由・進歩的な今日の社会では、彼の思想の近代化の必要を説く。それが彼の遺志であり彼に忠実な者は、彼を脱却すべしとする。

(三) 現実生活の強調と幼・小の連けい

デューイも児童の想像生活を認めるが、象徴を介する想像活動は否認する。当時の幼稚園では、人形機関車などの遊具を想像活動を促進せぬと禁じ、真似ごとの室を真似ごとの帯・雑巾で真似ごとの掃除をさせていたが、彼は想像活動を培うものは、現実的・直接的・率直なものであり、それが経験の再構成に役立つとする。

また「遊び」と「仕事」は、普通いわれるように差別的なものではなく、園児・低学年児童のそれは、連続的一体であると説く。従来なきびしい差別観は、幼小を分離させ、無目的な遊びの名称で幼稚園は、象徴的・想像的・気分的・気ままな保育を正しいとし、小学校では仕事の名のもとに、教師にしか解らぬ高い目的を立て、困難な課業を外から課してきた。そして幼・小両教員が反目していた。この不幸な分裂傾向は、デューイ・キルパトリック・ヒル・「児童研究者」の努力が、やがて解決させ、今日のアメリカの小学校下級部としての幼稚園しかも幼稚園を基礎とする小学校―教育内容の一貫した―デューイの理想を実験・実証したのが、先にはシカゴ大学の、後にはコロンビア大学の附属校園であった。そこでは園児の一年生への連絡を考慮して、園児独自の家庭生活中心のプロジェク

学習を行い、それに応じた現代的・直接的な遊具・教材を活用した。

以上は、さきあげた四冊の本を中心とする幼児教育思想の大略。この文脈の中からも、彼の思想の現代的意味は、自然に了解されるであらう。

四、むすび

(1) デューイとフレーベルは、根本思想が違ふ。故にフレーベル批判もかなり酷である。フレーベルの「人間の教育」には、人間性の固定でなく、連続的発展的発展観が十分認められる。またフレーベル派攻撃のとはちりがフレーベル自身にも及んでいる。(2) アメリカ資本主義上昇期の思想で、今日のわが国の幼児教育を併せ考えるに当って、楽観的すぎるきらいが多い。——児童中心の傾向が強いこと、固定的習慣や集団生活訓練を重視せぬこと、家庭的プロジェクトの問題点(ラスクがいうようにやや程度が高級なこととわが国の家庭の封建性貧困性から考えて)など。

以上の限界をもちながらも、デューイを高く評価すべきである。しかしまたデューイがフレーベルよりの脱却を説くように、われわれは今やデューイからの脱却をも必要としているのではあるまいか。



新

刊

御

案

内

倉橋惣三著

子供讃歌
B六三三頁 定価二六〇円 下二四

内山憲尚著
インドのお話集

あわてうさぎ
A五二七頁 定価二二〇円 下二四

村上幸雄編

幼児はるのひよこ
劇集 A五二七頁 定価二二〇円 下二四

長田 新著

フレーベルに還れ
B六一四頁 定価二〇〇円 下二六

落合聰三郎・周郷博編

幼児劇集 たのしい劇あそび
A五三三頁 定価二八〇円 下三二



株式会社

フレーベル館

東京都千代田区神田小川町2ノ5 電話東京(29) 7781~7785 振替東京19640